

令和8年度学校経営計画の達成方法及び成果目標に込めた願い

ア①について

全体研や学部研、基礎基本研、「はごろも」等の校内研修や、経年研修や総合教育センターでの研修等の校外研修など様々な研修で得た貴重な学びを日々の授業実践に取り入れ、授業改善を進めていく。特に今年度は、校内研修テーマ最終年度となる。テーマに沿って得た学びを全教員の共有財産となるようにまとめ、学校全体の授業力の向上を図っていく。

「みをつくシート」の活用を引き続き定着させるとともに、「星本」の活用を更に広げ、それらを根拠とし、教員が自信を持って取り組める授業づくりを進めたい。また、「はごろも」や「強度行動障害支援者養成研修」で学んだ自閉症スペクトラム症への対応方法、S T等専門家の活用、自立活動備品の紹介や活用などを通して、障害特性に対応した指導の充実も図っていく。

児童生徒の思いを丁寧に汲み取り、言葉による表出だけに頼るのではなく、多様なコミュニケーション方法を試しながら児童生徒の表出方法を広げていく取り組みは確実に進んでいる。今後は、さらに児童生徒が使う言葉を磨いたり、身振りサインやICT機器の活用方法や場面を増やしたり、「やさしい日本語」の視点を取り入れたりしながら、更なるコミュニケーション方法の拡充を図っていききたい。

児童生徒の「学び合いの中で気づき分かってできる姿」を引き出す授業実践を実現するため、プロジェクターや大型テレビ等を用いた「視覚支援」、iPadやBYOD等を用いた「学習支援」、様々なアプリ等を活用した「学習への意欲づけ」など、ICT機器を効果的に活用し、児童生徒の学びの質の向上を目指していく。

ア②について

保健指導や食育、体育等を通して、児童生徒が自分の心や体への興味関心を高め、豊かでしなやかな心と健やかな体を育めるよう取組を進める。体育では、外部人材を活用したり、体育備品を整備したりしながら、児童生徒の運動への興味関心を広げ、取り組める運動の幅を広げられるようにしていきたい。また、自分たちで作物を育てたり、作物の命をいただいたりする経験をとおして、生命の大切さや食のありがたさを感じたり、作物を通して人と関わる経験をしたりしながら、心と体の一層の成長を促していきたい。

ア③について

児童生徒の「好き」や「得意」を大切にすることで、「今」の夢中に取り組む姿を引き出し、それが「明日への希望」となり、その積み重ねが、自分のやりたいことやありたい姿などの「将来の夢」につながっていく。学校での様々な体験は、児童生徒の「好き」や「得意」を広げる可能性にあふれている。そして見つけ、広げた「好き」や「得意」を家庭と共有していくことで、「夢」の実現に向かう児童生徒のキャリア発達を促すことができると考えている。

「キャリアパスポート」を有効に活用し、日々の教育活動の中で夢や目標、楽しみなこと等に向かい自分から活動する姿、自らの取組を振り返って考える姿、教師や保護者からの賞賛を受けて自信をもつ姿などを引き出し、自らのキャリア発達を前向きに進んでいく児童生徒を育てたい。また、保護者に対しては、本人の思いや願いを大切にしながら、児童生徒の将来の「夢」の実現のために学校で取り組むこと、家庭で取り組むこと等を懇談会や面談等で共有していきたい。それらの取組を効果的に進めるために、「キャリアパスポート」「進路の部屋」「お便り」「職場実習の動画」等を活用していく。

イ①について

突発的で予想しづらい行動をとる児童生徒が在籍している本校においては、児童生徒の活動場所の環境を整えたり、教職員一人一人が事故防止の意識を高く持ったりして、事故や怪我の未然防止を図ることが重要である。そのためには、日頃の教室の整理整頓、活動場所の安全確保、定期的な安全点検などの環境整備を徹底したり、ヒヤリハットを共有し、事故への想像力を高めたりすることが大切である。

近年、危険度が高まっている南海トラフ地震、線状降水帯発生による大雨被害、暑さによる熱中症、児童生徒の校外への飛び出し、いじめの発生等の災害やトラブル等の際に、教職員一人一人が自分の役割を理解し、適切な対応がとれることが大切である。対応の基本となる各種マニュアルを随時改訂したり、内容の周知を図ったりしながら、校内体制を強固なものにしていきたい。

児童生徒一人一人の実態に応じて、自分や他者の命を大切にできる行動がとれる力を育てていく。知的障害のある児童生徒は、実際の場面で柔軟に判断・行動していくことが難しいため、各種訓練や学校生活を通して具体的な体験を積み重ね、実際の場面では、訓練や学校生活で身に付けた行動がとれる力を身に付けさせたい。

イ②について

児童生徒が安心して学校生活を送れるように視覚支援や構造化、クールダウン室の活用などを進め、わかりやすく居心地のよい生活・学習の場を提供していく。個に応じた視覚支援（情報処理の方法、提示する物の種類等）や様々な目的に応じた構造化（時間、物理的、活動、流れ、課題）を意識し、支援の質を高めていく。また、それらが効果的な支援となるように「支援の引き算（精選）」という視点も大切にしていこう。

教員の価値観や考えを押しつけるのではなく、児童生徒が自発的・主体的に自らを成長・発達させようとする過程を支えていく「発達支持的生徒指導」を徹底する。そのためには、児童生徒のチャレンジを後押しする「励まし」や、努力や成長した姿への「称賛」、児童生徒が安心感を覚えたり、自ら気がついたりできるような「対話」など、心温まるかわりを大切にしながら児童生徒との信頼関係を築いていきたい。

事務職員は「総務・財務」等の専門職であり、学校組織にとって大変貴重な人材である。事務職員が教員との協働場面を意識し、校務運営に積極的に参画したりすることで、事務職員の「働きがい」を高めたり、教職員の「働きやすさ」に貢献したりしながら、学校全体の組織力の向上を図りたい。

チームで児童生徒の成長を支える特別支援学校にとって、チーム作りやチームへの貢献意識は、教育活動の成否や教職員のウェルビーイングを左右する重要な要素である。教職員一人一人の良さや個性等をチームづくりに生かすなどの「認め合い」、困っているメンバーに声を掛け、手を差し伸べるなどの「支え合い」、一人一人が専門性を高めて切磋琢磨することでチーム力が高まる「高め合い」を実現するチームをつくっていききたい。

教職員の仕事への満足度を高めるために、「働きがい」と「働きやすさ」が両立された職場作りを更に進めていきたい。教職員としての使命感の醸成や児童生徒・自分自身の成長実感、保護者や関係者との良好な協力体制、役割を任せられ果たすこと等で得られる「働きがい」。業務量の削減や学習内容や行事等の見直し、業務の役割分担の明確化等により時間や心の余裕を生み出したり、一人一人の業務遂行能力を高めたりして得られる「働きやすさ」。その両面を教職員一人一人が実感できるような取り組みを各部署で具体的に進めていく。

ウ①

交流及び共同学習（学校間交流、居住地校交流、地域交流等）や大学生ボランティア等との交流、他学部や他学年との交流を通して、児童生徒の経験を広めるとともに、障害のある児童生徒への理解啓発を進めていく。また、交流が経験の広がりだけにとどまらず、児童生徒の喜びや成長につながるよう、事前の打ち合わせ等の充実を図りたい。

児童生徒の活躍や作業製品、作品などを積極的に地域社会に発信することで、児童生徒のもつ力や可能性、学校の教育活動の価値等を多くの人に知ってもらえるようにしたい。また、それらの取組を通して、児童生徒が自分の良さや可能性に気づき、保護者や教職員の喜びにもつなげていきたい。

特別支援学校の地域における特別支援教育のセンターとしての役割への期待は大きい。しかし、児童生徒や学校のニーズは複雑で多岐にわたり、すぐに解決できるものばかりではない。互いの思いや立場を尊重し、良好な関係を築きながら、よりよい解決策を一緒に考えていく姿勢を大切にしていきたい。

ウ②

自立と社会参加を最終目的とする特別支援学校では、児童生徒と地域社会とを接続しながら、多様な人とのかわりや本物の体験を通して、将来、地域社会の中で生き生きと過ごす姿の実現を目指していかなければならない。学校の外には、校内だけでは味わうことができない人とのかわりや様々な体験の機会があふれている。それらの貴重な教育資源を積極的に活用し、児童生徒の自立と社会参加を促していきたい。

「自立とは、必要な支援を受けながら、もてる力を最大限に発揮して、自分らしく生きること」といえる。在学中や卒業後に、学校や家庭以外の関係機関から支援を受けながら生活することで、障害のある児童生徒の生活の質は大きく向上する。必要な関係機関と効果的に連携し、得た情報を共有しながら児童生徒への支援の充実を図っていききたい。